



9

80

9

8

7

6

5

4

3

2

1

4

5

6

70

60

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0





柿本集上

ひまんの圓もさきは人よ

すみだらまの山のまよつて袖とすさん
林山よりお葉のあくまむらうむれい葉わらう
そひの壁中そぞりじまのね心とけそひへ思へ
しもにすはつめうめうめうめうめうめうめ
くぬの浦のまぬゆきなむせは思へとす河のま
林風のむせのまぬれりよまく猿のまんあま源よ
うのやまうばのつみとまむれもよいようゆ
羽羽林林もまくううう人のまね清くゆ
タまわる君まうさんとゆれあまうを食もまうとま



あはれのやううらゆ
あまにほんとくの
あはれのやううらゆ
あまにほんとくの

トの事は、おまかせだ。

あらぬよの心がこもるかに
ほゆの向よみゆきをめぐらす

あさ 1
まほのよみうて酒みらわ

あらまよの浦よ舟よ風のそんりゆき渡
くちうきひきのきよ今よおほま人のたまむらん
石見國よめよひてわらすくらむか

まくのまゝいひかくよひもむれよひもくらんせんじゆもくらんせんじゆ

わふく 日々

也

セのフ

蒙古文

いとよしとくらむかくすもとすにそ
がくまかことかく
そのまくやくとくわく

あきとせうせにまくとくわく

あきとあくまくせうせにまくのりや

ひくわくまくわくとくわくとくわく

みよきわく

きくらのあんとくわく

けくわく

くのあくわくとくわくとくわくとくわく

えのあくわくとくわく

おのめのあくわくとくわくとくわくとくわく

あくわくとくわくとくわくとくわく

おのめのあくわくとくわくとくわくとくわく

えのく

あくわくとくわくとくわくとくわくとくわく
とくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

あくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

あすかのあれうらもと見く
いはのあれゆにひてとくま人のみまらわ
あまうるひのあらとくわあーのさうりあひのけあ
んこくひとくまーくまうやうらまのゆめのよあ
ゆうのゆうのうすんしゆうあとのせにほやうん
ゆあゆうれきとくわううわう月ひやこ
あらのうれきとくわううわう月ひやこ
ゆうやあくのゆうのうくわうで産くまのゆうあくま
さあきのえせだうゆあくまのようてくま
くるくじとく

つまわうつまにまくまのくまがくまくま

いみのくまでくくりゆくくゆく
ゆくくはあくくのくくくれれとくちてくわくま
いとくのくくとくくとくくとくくとくくとくくとく
くくのくくのくくとくくとくくとくくとくくとく
山乃くくとくくとくくとくくとくくとくくとく

柿本集下

人よりお詫のまことに御うつまつた
山宮の月日もとくさんありますからもん
はしりのあれをそん夏までがうつまつた
御うつまつたそれ神せこうまれ立祀となんとす
部云がうつまつた卯祀乃うさとあれや居りて
見ゆるはあわめ秋宿れ花ぢるるみよる
かげのこえどもこのものもよきうんねくさん
ともよのいりやあん紅のきよつじ祀のつらよも
亥年のおけ夜もあめとあう秋神のうづ時も
み肩乃つらそひて皆さま秋神ひめやいもよあひて

うち日ひまめうさねと今やまくさりとあるあひて
えのあうちれわらうのうひえりをよまたよれまな
うのうひとねつうてあせもおうねのゑやくうひと
あひてけかきぬとえのあへうまやわくうひと
れ里とせうつぎとよあんえのあせよほくうあ
そくもあひいねいとあんえのあみうかわせ月りとぞこ
林のまにタよほのあみうかわせ月りとぞこ
えほくわくわくわくの津のからとすもおのえよ
ほくのえをよかわくとよあれよ君のゆうておよむ
えほくうううううううううううううううううう
銀河旁をよようたううはあまのまをううううう

かうちよみるをひきせよゆきひき宿をあきま
えほせとひくとむりてすわすやまとあらひに
あまのうふをすまへむちよめのまよだ一月の
セタ乃こもひあひまつてひと月日ひつう年あくま
おののゆめ日よりそのうへ津と三つともとほせと
えひもれまどりあせよひり君とまほさんはのうえ
銀河あまをあはせむせぐわたりをまくとまくと
もゆのつまうみのうへねだんとおよわうるよ
いもあてたまき、約久里のあまのうへあきくへ
白鳥のをうぬけまくねまくやうてまくとてあらう
おのゆめよひのやせりまくまくおのれとあねま

あまの羽衣とまくとまくとタマキとあひき
まされの宿されあがめしれもまくとてかくん
人へまくとまくとれりまくとおそれのまくとれりまく
お解の衣つうものまくとまくとれりお解がれとあみを
我富よまくわくまくとまくとれりお解まくとあみを
わくとまくとまくとれりお解とれりあまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
無くかみよせんとまくとまくとまくとまくと
妹もれがりよあうとまくとまくとまくとまくと
おれいはまよせんとまくとまくとまくとまくと

れ風よかひやうかうすはるやうきうちやまかれて
あそきのうきがうねやすらひくおうじこまい
頃ねりうきの起てれの吹かうよがりゆるまち
山ちくあおとせれの神みのしをうつはぬひよ
足のゆうかまけきとれまうすとまく神地
タケよかく自くのうひよとたまけとあふるる
松風のゆくゆから緑扇のあまらうかとに自くも
ひをまわおひくやれタケよかく自くにまけとあふる
松風のゆくゆから緑扇のあまらうかとに自くも
自く草よ村あうて自くのひあまけの松のまたぐり
草代ともよゆくゆよまけひゆうとまけよかく自く

湖ともやもせうじてうる波よかくうきうきあまゆよ
林木にとげてぬれどくゆうあうとげてうる波
のぬれと林の紀よくれをまくあくとく紀わくうあふ
我富れ、もれぞうみとぬれよおれぞうみとぬれ
けじのれのれよ、れもくらじぬれをまくもく
このは乃わうきぬれよ我萬葉の下萬葉の下
厚ひひまくまくにねれしりみうれれをまくもく
れぞれぞくもくもくぬれよとぞくもくもくにまくもく
ゆう金のうううううううううううううううう
御れぞれぞくもくもくぬれよとぞくもくもくにまくもく

秋やみのゆかりたれべきはまにあまくわかゆるふ
このよひもとあすけねるうねのゆかれてよ月をまつ
わせこゝへきのうよとおののきくさんと月づけ
思ふよ時々のあひあらざれとあまま月て月の清さと
白夜とあみげくまくまく月のきぬ月へされとあみ
あひてよつれときくとされとゆゑのりあすねのりあす
あ乃花きくはりせんじゆくはるがくとよお風う吹
秋山のあまよいまくわむちひとお風のよまくに
秋風う吹ひのうわりよ時ああくよう袖わまねをくは
むくはまくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
れまくとゆき時々のあまよあまくわくはくはくはく

され事と申すと多くひれ鳥羽の財産よりしてまことに
仕合乃序と因よやうまくさういづねのうもあわぬ也
月トシ
れのゆれりのうよとけりとめのをよわくと拘わゆらむ
縁タガもきのほり野のたまよとくのゆせらるるも
あきあらはなもたまよとくのゆせらるるも
おもよそにははるのうち財へんをおきゆる
御ミサあきあきとめまやうとがれゆる
我富よきひねまくらうもそてれおもあらぬ方カタや加えん
おれいかりまひゆ立山ミタマツヨイセとわちまた君と多く思
うあとう君とてりんおれのその功名乃くか物モノ
かりの身とまきておいてらう爲の秋翁アキノンと称せこ

さとれり聲のをまき初花うららかす
久月をあなひてつますはまてうら行花うら
秋の秋月より君へやまされまくもまの花れゑま
日 ち月のち月の月ありつと君へまきまくは秋えんま
ありふまよ角の放棄もあそびておもておもて
あいきの山ちもあそびうれせよおはれ
あはれもとわきよあくもお運へ度もとすふ宮津
あそびとめくわうれゆめのうきびがくもあく
ぬるの梅乃花れも久月おまかまく
梅花まくはとおりうてひくらにく袖とうる
きてゑくまくあるくよ秋翁の初花うらめを

あそびあらまくわくとあそびうるを御くよる
阿房あひゆうる言はまくとも君えあらんとやううだ
我翁よじてうる梅と月をまくまくしん人もうか
月のゆく風へぬすむ君うこね取ハがれてまくも
あそびうらまくとけ墨代羽のあまうる君れまくよれ
梅乃花それもみに久方のあまうる君れまくよれ
日 郡云なくやく月の外うれもひめゆきがあくよつ
拾 ちよありて一あいもまくとけ墨代羽のうくも

わきまえりあらとめうてうつ風とうりてむきうんくうの
日 水風の月とたまをひくすのとれまのまきははり
日 締せことようじとせいか締扇のまきくらはるみち
日 みゆきまの田河乃まつるわにますれよ
日 おけうまうて

古 猿田門紅葉さきう神うひのましもむよ樹々すじ
日 わうね葉れかく白雲とつまうか秋ぐともに清めくま地
日 あくの山きくさうとくゆくゆの時うとくまう締扇う
日 締めのこめうかねうまうまうあうひうて締扇は
日 ち柳のうきふよわうやせまくわくわくわくとく
日 みうこにゆうわゆうひうちうひうとくとくとくとくとく

日 まふあくまくやうとくのうかくまくいとせまうねば
日 風あけへほうう岸のまきあれ締よあくれてあきあくせ
日 のくすりあうあうほほほほほほほほほほほほ
日 そくらなの葉乃うさがめにくちよぎあきう君うわ
日 えくてほほほんとくくくくくくくくくく
日 まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
日 あくしてとくまくまくまくまくまくまくまく
日 あくの外やほのはうひまれの風う。あくまくまく
日 ぬまくたのうつひも神う。あくひくわうも神う
日 まくいつもくひくの風う。あくのまくまくまく
日 まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

あひのくつひをまめふと一月乃とわがやうか
うねり山をうけむあうなりすとちよとて
みのきくわせあまくよ處かきへやうとさくゆまき
りかのうちやてよくうてえり
しよせんじよくあせをぬゆとよあめりとくまくま
りはれあれかくまくわもあめりとくまくま
のゆかくおのゆくもくとくまくま
ちよかくせのゆくもくとくまくま
あうよのゆくもくとくまくま
うねりとねよかくまくま
あうよのゆくもくとくまくま

からくとありの傳の初音に鳴るよや。あさりをす
きの神のととのいとて甚めのひづれぬとくすとつる
いふありせん今もおとやこのゆのゆにかくおさん
もくにあてをせよみやうすもあらわくさんああらう約

かさへのやよかとうけむらうとよかとよかとよか

わよとこうねくれと様はの池乃むとよをうがお

渉入のあらとみきうりゆくとよとよとよとよとよとよ
あらあらまとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

う月のあけくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
まうとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

うとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

拾

タれハ松風よりよきかみすらにあひ衣ゆきとよせん

拾

おきよしらきくわいのゆきとよせんとよせん

拾

まくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

拾

おとくのゆくとよせんとよせんとよせんとよせん

拾

おとくのゆくとよせんとよせんとよせんとよせん

一

柿争の人あらわよあらわよあらわよあらわよあらわよ

拾

一

二

とくのりんとねじりれといまよらう事
わうてえのゆふよふ月えすにあうる年
そひとまきわらてたまくまくの
とあくまくのとよんじうかんわ年
ふまつらうてあらんとよんじうかんわ年
きえまつらうてあらんとよんじうかんわ年

米田五箇國

やまろ

うらうてくわぬまじのとせやまのとげおな
くまと

くみよまくまくのとせやまのとげおな

やうち

朝まくわうらうらやう鶴山ゆくもあうねのゆう
いじん

あうううれしをうむかづきとくとくあうん
はのくに

河のさへ入れば水うてとくとくみだれ波うりゆ
東海道十六箇國

いふ

うりぬむうそまきと山房うれのううかせ
住場

ゆうまくうひまくうあらんのせいのゆうとすま

卷之二

卷之三

あめのゆき

あすかむじをうかうけ花をすかこむる

ひづら

川をまくらじにまくらへりよがくわくわ

東山道ハケ園

ほほん

きれあみをみゆのじとれいかくわくわいあまざ

見乃

やまとせせらむらをじかにまくに浪

ひづ

うてけみのゆをほせはく六月けねあまび

あめの

むかわくとくわくわくわくわくわくわくわくわく

みんじを

まくらぐる古節のほみよむつまよりお花のま

もつけ

まくらねとくわくわくわくわくわくわくわくわく

むかわく

いはくわくじのくわくとくわくわくわくわくわく

そと

タやあるわくわく月朝乃そくわ花乃ゑのゆき

お隣通

わき

まもそわきよもじめつねみくをあいのま
あらせん

まゆとえゆくとつらはおちまきまほとくに識
： カ
と乃りかわけりゆとおとくとひくわいよきひるれ
乃と

まけのうらわゆの梅花うちのうふせりひるま
あらう

まれのまむらうにまくすておひせがまくへれてま
まらこ

人さすさぬきおやのゆくちとまくわくわく
ウト

あまらむうすにれりてまくわくわくのゆ
タイ
山浪通 丹後圓宣作

そよ

まさめふくたとゆくゆくしたまくまくとく
たう

ま處そらまゆとゆくゆくとくのまのとくまの傷けり
いあ

まゆとほのうらうしてまくまくの山を
わら

金

まき

金

山とてきよとんせれととくはえひのまくら

そ見

とよ波をかのじゆくのまくら

たま

草のまよとまからぬのまくらをうしの
いたも

わあく今朝すとおあはれとくまくら

君

山陽道

まくら

まくらうりまくらのせうまくらぬくらまくら

まくら

岩見がまくらのまくら

いも

まくらまくらまくらのまくらとてまくらまくら

まくら

まくらまくらまくらのまくらとてまくらまくら

まくら

まくらまくらまくらのまくらとてまくらまくら

まくら

まくらまくらまくらのまくらとてまくらまくら

まくら

まくらまくらまくらのまくらとてまくらまくら

まくら

まくらまくらまくらのまくらとてまくらまくら

まくら

まくら

十八

あゆみ

海のうきよにまづくうきよわきも人よありひさす

南海通

きりくに

あきみつむせのまき柳うきよとく風うきよとく

あくら

わくらよとく風うきよとく風うきよとく

あくら

こくはのゆかとく風うきよとく風うきよとく

さぬき

せけとく風うきよとく風うきよとく風うきよとく

伴

くわくや風うきよとく風うきよとく風うきよとく

そら

えくとく風うきよとく風うきよとく風うきよとく

西海道

うきよとく

かくへうきよとく風うきよとく風うきよとく風うきよとく

ひせん

人よみとく風うきよとく風うきよとく風うきよとく

むこ

まくとく風うきよとく風うきよとく風うきよとく

くに

ゆせ

まの野よこのよをせすれぬとくわのゆせてん

ゆふよきよのうすれしむるのゆくよのゆくよ

あふもひよのうすれしむるのゆくよのゆくよ

たはまみ

れりよせよせよせよせよせよせよせよせよせ

ゆま

まのれよせよせよせよせよせよせよせよせよ

ゆま

ゆよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

ゆま

人筆

二

書寫年文紙手跡右體也

延長五年六月日

此年以三ヶ月年號也

同六年二月日

藤原朝臣判

船恒集上

延長乃節時よりて取組みのよつま
りのひどとにとくればすくはらんさせ
うと思ひてあるさんかう人のおもゆか
りうまきのひづかまくまきのひづか
みまくの花乃節時よりて取組みのよつま
りのひどとにとくればすくはらんさせ
うと思ひてあるさんかう人のおもゆか
りう人の思ひどらうたうてやせよせ
中林
うめのさ

船恒

三

詔す月が葉のをいゆ風とゆのめどもせしもづ

あひぬ惠

あんくのゆきのゆきかよひけむかた
さひてまうひうひなつゑをなすひよ人まうん
えの人のゆきかよひうひなつゑをなすひよ人まうん

あひて乃ゑ

別くはほりきとふうひのれこむるあうよ
むじよとむかうすわらしよかくもあうよとむかう
久のや舟とわらわのりうきよよそりかねを
ひだわくとゆわくわんたみを秋うらわ
ほきアニ年ナ有ナ言たらのとくわくよ

おせよとゆくとくふ二箇

まわ花とゆかれたるも今まよ翁のとくすくまよ
とく時あらうめくよ萬葉花こちるをよまわくよ
まよあくまよあくまのむかくはうとくまよ
あきナ年ニ月ナ有ゆせゆよてよく
ゆく乃大將の軍賀れ屏風花とくら
てうへてはりすふくよひ

まよあくまよあく花花うらのあくとくゆくよ
あくまよ花の下まゆかわくよくよくよけよ
ほのひかねと松風吹くにとくらよくよくけよ
たゆナと年アのとくのとくの屏風の

見性子

卷之三

あつまつたるの心はかくとひかへてゆきまくら
さかう七年活潑にゆきまくら
水の風ぬくわきわきやわがみやれりまのせれ圓やうん
わよくわくえびとわ

あそぶわがまわらわのよし
野ほこづやまく
人のよきゆゑにか節元のよし
田の

かの山のそとておもむく風す
ひまちる
行くよしわざあわづね葉ゆく風よそむの野りす
壬午年二月二日のお月日わづき
行けりまくはれをまく山乃とおとづけりまく
まのよみ風ゆくよまくまくとおとづけりまく

四 湘南風の音 五月

おやこのねよきゆ
さあみうら

卷之三

寫生錄

萬物皆有裂隙，那是神在教我們

江上之清風，與山間之明月，耳得之而爲聲，目遇之而爲色，取之無禁，用之不竭。是造物者之無窮藏也。

うかくあらわす所の事にあつてかくもと

大同

うるさくてさかなのまゝ

七言詩

七日午後
天晴れ
風強め
雲少く
空のあまり
寒さ立つ

の書

八月十

、
、
、
、
、

のうて、おのづかに、おもむくと、おもむくと、
おもむくと、おもむくと、おもむくと、おもむくと、

蒙古文

あつまひもとくす年月のつづきあるがからず
よこかわらのゆゑとて下りてゆきゆきとて
かわせられたるよしむらのゆき

卷之二

卷之三

よたにまことのうへかたをあめとくふ
れはみあきの時へてまつり
ゆゑどもみゆきのらへようくまつらへとわい わが身
よしとくらへるよみゆきのみゆのねうるめもむれうる
えゆくらむとのおゆせ行幸とくせむら

おまえ、さうのうれしさはまだあつた
お前の心は、みやもんのふくらむる
これまで

水のあめり
風よちくさの紅葉のうつゆはるかに
のとうの菊

身外化

卷之三

君はあくまでも
物事の本質を
おさげたる人

清江先生集

めりあぢ続く
あくうゆきさめうす月のらはとくえん
はまかづきのあゆくよそうりくわくらむ
つるのまくわく

めのうれしき

ゆくまく入へぬれども
おひがひまことにあつた
わよりたまうんあくらのみゆき
れうほのす合ひたるにあ
さうんゆくらはよ拂ひたるにあ
まつのゆきまつりはよのゆき
ゆきまつりよあられてある
花穂ひづ人のゆきよあら
花穂ひづ人のゆきよあら

いわやさくゆきまつりあまのわが祀のうれし音節で
風よおれどもけぢらきものえよまくはん
うよひたまほりもく 猿祀をかむらうと見ていうさん
かふみて風あはれと御のまくらはるそ祀のあ
よおきまくらはるそ祀の祀よゆまうとほほ
いがそのみでをすもよつておうすう前の祀も
くすのとまうとくぬ時ふむまうとやま祀の陰み
ほ山あくまうめがハ朝云あつてもし秋霜よけ
じきききてあづまうやうきつての處のみくらはん
ようきて人まづせんぬちやうとくまくまくうまく

惠

渡河いそり水うながんすと秋もとぞり人のあま
まれかよわざひなうくやまくの人のほきにり
人のうと風ひぬとつうひのうとや居つまうん
うとも着にむよじあたれりつうわきつう
ての中の家の家内す合よそめれま

拾
まうちれすおへ秋の秋祀まくはまくらはるそ

中春

まうてまひまくはまくらはるそとよせよ
まくらはるそとよせよ

のうめのうめ

ふるのうきはまくひかね祀いたまうとまえけり

中のうづ

拾 郎うなこまちうらまけわさにうらまわれとせすの

そとんのあそ

うよたあひがれとせすわらわのねとまくれ
まとまつてとわんむすくゆとよまゆめまほ
風よらうおのひまへほくわよ湖のゆくよ
せよくみゆくとひきめくすまうとまうの
れのれぬくゆ月とくおまのまくとまう
かりてくらしのきとれすれとくよとく
けとたんまくみうみうみうみうみう

十ニ秋月

新古

ゆうらうてあくやせおみにれうとおのまう
けうのまうとせんじうておまのひよりとく
れの節とくいぬうううううう
せいれくのまうつよこく水めううう
とくまうとくまうとくまうとくまう
セモ青竹うううのあくとくまう
りとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
けうにゆのとくとくとくとくとくとくとくとく

内ゆ屏風ノリ

あらわぢれ葉の色めかすとひまぬのあへ闇也とひは
けのまよとくわおのやまともひつもえよあ
日 神宵時あらわすおまへたる人の波打りに
日 その也よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
日 もとよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
あらわぢれ葉の色めかすとひまぬのあへ闇也とひは
そとみのとすてやうじくわおの波打りに
あかねと秋と冬の行せうづきにとゆまうり
かうとめくは哥

春流をこめくはよしよしよしよしよしよしよしよし

あらわぢれ葉の色めかすとひまぬのあへ闇也とひは
夜もれにまのひだれ葉の色めかすとひまぬのあへ闇也
あまくまくでいさてね波の雲よしよしよしよしよしよ
よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ
あまくまくで二がおう秋よしよしよしよしよしよしよ

あう哥

わよむすうとく夜よしよしよしよしよしよしよしよ
夕乃とれり時よしよしよしよしよしよしよしよしよ
よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ
にようけあわやよしよしよしよしよしよしよしよしよ
あまくまくで

内ゆ屏風ノリ

よもやあり 池す月あ
まよよみへ りみうさめ ゆきの内 うみ山の
山れうも さじ日ふり りあゆも むひとく
うきら 何れもれく きとゆり るきく
庭乃はな しるくあゆ ゆの草比 うすうら
しゆせ ひりかくあ あくぬの 幸をあゆ
きくけむれ

躬恒集下

延喜十三年十月九日 肖像
うか女一宮のゆりきにそよてせぬま
かきうげれものにとくにてやくほ
きうの音

あくうう山を思ひうのゆき心ひだんせ
ゆ

やうとせ船うか女んかくく河せうくばれよ
そりく院のまみすて合ひく
づまうう鹿うかくか女郎花とみゆみかたよ
とみよとみよとみよとみよとみよとみよとみよ

身外

三

君うちのひらまちのわよみがわのふりありと
あまえやなとまきん林育あらゆるよきのまこと
れ

わざのあつた
かみのくわく
かみのくわく

トモシテハシマリ

トモハシテアリ

者もあわせたまに、林をまくらぐわき
めふたてよひ、身のまゝまくらぐわき
めふたてよひ、身のまゝまくらぐわき

あらまきひがくはくわくやまとちてゆきしめもとゆふ
夏草の音くじて風のきひれか人をかくわづるよ
ゆのゆうをほむらおたけで人をかくわづる年
年とふくめのゆてはうれのゆまくみのとするふ
かくのちくゆすは獨れうどくくさくゆく
りくく極くへうやる

あくせくはぐれとつれいゆくのまくわく
獨れうさんねいがもととまめから離れちくわく
とみのまくわくと獨もうこのひとみくわく
春の日はくわくとんれとくうせきくわく
じうのときくわく

しきのまくまくみくにうながの元よもぎけ
いれうけ

ゆゑん

えもいかとくすくまのとくまく人のくわくわく

けくち

とくまくしまくよくまくあくまくのくわくわく

かくわく

まくまくあくまくあくまくあくまくのくわくわく

わく

まくまくあくまくあくまくあくまくのくわくわく

ほく

身口手

卷之三

かくじよ

セタヨウカリシテアタマノヒトツヒ

同上

周易中說

りはやさんうゆくわき月新とくさんひるみ
あらだのまうめしよまよおりよてまひ
うねうげの申納云家うて

わらばのまゝに
うれしきの事細く家うて

卷之三

うゆく
のあつこ
むせん

格
蒙古語
之
文
書

身忙一个

卷之三

日
之
水
火
土
金
木

題

久遠のわがそえ行はる月と
さくらの水よみがゑの

いのうに秋のつまむあべとあはれのう

卷之三

アラタニシハシマリシテハシマリシテ
アラタニシハシマリシテハシマリシテ

卷之三

ウラハのホトトギス
ウラハのホトトギス
ウラハのホトトギス
ウラハのホトトギス

新奇

思ひかくいあつてすとんと山へ出でまし
お出でとよみそくは晴れの日もあれば
往つたる山はあゆんがりうなのとくにてうきをも
おとす月が来の時やまくとてかくちせよやうの山
思ひもあひもさすおとづれさんといふもよし
さひものさけつうとだひておとづれよし
おとづれもすまかぬわめまからほ人のあうひ
ゆくの年がよきととくひよかと様子ひづれ
ゆくの年がよきととくひよかと様子ひづれ
うきのねうえのひいきよとひよひとひよひ
うきのねうえのひいきよとひよひとひよひ

今とれてあらざのひあひひよくとせうのひうる
せうとよみそく人よみそく人よみそく人
せうとよみそく人よみそく人よみそく人
せうとよみそく人よみそく人よみそく人
せうとよみそく人よみそく人よみそく人
せうとよみそく人よみそく人よみそく人
せうとよみそく人よみそく人よみそく人
せうとよみそく人よみそく人よみそく人

九月九日

危ひあひをゆくわくとよみそく人よみそく人

山へ

またよみそく人よみそく人よみそく人よみそく人

山へ

三五

娘の事も思へぬがの事にえとアラカツトモハシミハス
おのよひにけりとやかむすらヤムンセの事によ
義の事はうとされハ前をくわ
ゆきの事の事はまくわ
マクシんセとハモレトヤハ
ゆきの事はまくわ
セモ月をようゆきもよ
あひの花ちりさんねすりき
とらふみよとアリ
む神の花ひすりに山をくわ
月をよふかの花を
月をよふかの花を

四月よ山のあらそみ

白雲もまた消えてぬ山里へあらひの暮をとるん
月見つまむとまちや郷ふらうかよあらううん
さくまでおきひしてあいわき月見のそとれうけ
よとにへとまくねむりゆくあいもむん
えつじゅくあらうくいのとまくよつあ
あまのうな船うやす津うまくよつねどひのむ
くさんわう夜うむねうきの花のえよつれぬ
行くむのうすうりう山里にゆうもれはうりぬ
うれうみうねとまくであちまくわうらう山の猪う
おうくわううきうだくよ山猪うのうくううてやもれ
ううぬまうかうとらうんがの元池乃のあくうはま

我宿の地乃處々みまわる山郭云々と日うる
郭云々とえ月あのみ」お月行きまつりあけ
え月のたうれはの月紅乃背もけややうんど
みうの山乃ゆきとあるの内うらすれすねはあり
わやとれむれの花さくゆるおのへり鹿むとくわ

七月七日人うきくゆ

うちうそすじうるんハセタのあ東つよがせよ
林の節れ花のソクシナカツてわうなにうつる
立くうそすじれまをゆくよみてそ山川の紀
菊の花見つあらうれもあくと人のふうううるや
山うううきくうおおうくやうんうつりうる

山う端のまことくと月影と菊ひくまくと花うる
久方せ月ひとよとこのあまじ高よきとれ人のふう
夕うりにいふせとと月けのまことのまにたう感ん
月の月乃ひのふあらぬの郭云々とあたをうけ
りぬまたうんとうく今秋うううひくゆうれかめ
わくく晝月けよやくまくゆうふふうるやう
花とのまちあふひとあとひうらやまにうる
年ぬくよつし高はうらゆうとあくすとて氣と
あれ事とひうらゆうとあくすとて氣と
ねのよおととまくとくねむとれうの極よあもひと
宮のうよおととまくとくねむとれうの極よあもひと

まくらにひきみゆきやうさんむ様子のうとうとおもふ
まくらのうとうとおもふあわせてはよもよううなまめの
うとうのゆゆく時々ゆゆぬのうとうとおもふやけの
ゆゆくまでまのうまうに大井の内内にまつり
あひておきとひきふたとまうううきてぬ
わかれんげ

そしとゆめのまつ井あわせとてひめ
あひてれいとひをねとく
ねのゆゑにあまつてく
七月八日の夜人あひてよされと
やうわづれのすき
やうわづれのすき

いはくまほんのうわく
ちゆうじゆう

大
說

あ
の
ま
で
か
く
あ
は
せ

わざわざ
おもてなし

君と異よへて人ふれぬが如きのむりや
今やあ

مَنْ يَرْجُو لِحَافَةَ الْمَدِينَةِ

久のとど

うすもまくらのゆりかへてみねよのま
ゆうもうてうもあやまと山風林のうよあん

人のあはれの山

ほそそよぐまれとひのせたよわとよひあく

十月ね葉とじよせ

十一月ね葉とじよせ

み葉せめらう游ひもとのむだぬ錦とほをう
風ふらうめらの色と秋月が紅のまくせあれ
五月あのあらうめらの郭とあらうめらのあふ
郭と一とおなまてあらうめらいそく人のひとえり
うとねのみりようかと、かきらあらうめら

皆のゆれとけいじくう家ゆのとくうかふく

延承十七年九一日おせみよてたくに

附屏風のすゆせめらうめらのすきか

宮のうちにもやうめらくわのゆがまのまくせ松とす

竹と竹

ちあくは野のまくせ山風乃とよわとよく

ゆとよ

あきらじくらとよにまくせのひあひよとよく

けりのゆ

音もひづりはのとゆゑや風のあらひのとゆゑよとお

うそそ

うせ川きのわまくらむゆゑよと人のたどりあふれ
ちづる乃

か衣ぬよつむすを柳なりとすうのまへまん
まけそ

お葉れがまく時がけよめらめうらうら

わうい

むうせきみの浦よすじあまのまくらまくら

はま

まくろに秋の月さんあかまくしてまくらんまく

う

まくらに秋の月さんあかまくしてまくらんまく

おうとぬ

うの浦よすじあまくらむくらうのまくらまく

節よのまくら

まくろに秋の月さんあかまくしてまくらんまく
おうとぬ恩づんねの聲に一聲を挿す花の声にて
ひくやうあうじあめたかうわうり山う
ゆうてまきぼーたあうらまくすれ屏風
ううふまくくよたうひぐるをあめうらに
かくうだがふまくうううううううううううううう

うかくのうてゆきあはれいと
その内所内乃うと
のたがゆまそ

馬の山の道へいりややまをさきてよ
秋もむじにまきはれひまほのまよあらうる
あまがちたきしとみはくはく人よあらうる
ゆいわくわがはいのねうらうぬうへまうり

山里にかくはるの跡つまむやうわみんま
きにのまくわらふまちりそめとくとく人を
みまくわまくわも済、ひよのゆく今もま
しゆくのえ、けしに爲のれねみくらうちな
くらむやかのいまとまじいまくあくまくせん
難かずれもたのみたまくまくまく

わくのこよみがけむとまくらのそ
寝てゆきのよもぐれのれまくのひよ
おれから思とのよゑ頃とその事あ
はくまの宮かく今きてよまくの宮いれと
せん十八年八月十九日の家よハク

そちよ佛わうとうとつ鳥のむきかへよ
てほくまうあづ

河の水の山はすらんあるまつもよが行
ひうなれもおきゆかねほりはなまくわ
あさあとおぬらうまやくをじてま夏冬の
時もあと君あとをめらまのからく算よ
あうてくまなとてせうりゆ

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆ
きのんむかひつきゆきゆきゆきゆきゆ
ゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ

ゆつゆつ

のうと西すくわかきとくわかきとくわを
おきのりこりのよのよの
おまむみまむらとみのみのみのみの
あきや一九月廿日敵上人お葉又はま
タよたのめのめ將二人のめうて
あ人のめのめのめのめのめのめのめ
うのうのうのうのうのうのうのうのうの
のうのうのうのうのうのうのうのうの
人まみ室のうのうのうのうのうのうの

さうにううてかへ

今ううともあわすまつむら人全うり
まわる

乃

菊のむねのせとまうけうてあくまくとひ
れううれす月よあれのうんじゆをとひ
まわるあくまくとまうけれめにまわる
ものやうにかまうける
まわる花ぬじゆまうけまのゆくもるふ
れう月のやれのれのれ命婦まくらんう
まくらんとまうけくおまくとまくとまく

あそまうけくはう

タのまくとまくとまくとまくとまくとまくと
野よそそそそり人のつととくくく

かくまくまくまくまくまくまくまくまく

人のまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

せりあそそぐとまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まく

あそまくまく

おうううう二月のまのめのめんまく

まく

四二三

の手得る事うて

わがも店をまわる羽毛へうれとおとおと
かくまくゆらの祀きはやされあひうり
うきうちかくうは獨祀もとうはすまちを喰
ふのそらひんくくめぐみわく御もとうら
春くれどもひたてあまの用のみそよあやせん
人ちども今づきま處せほゆも名づてはる
うきよあまうる菊のむらさきと月ひそめ
おわづきくわあわの経る

一年のきくふあると夜あわきしとくわく

今またに金坂山の紅葉乃ちぬせもあきてあけ
萬の花やうてあすけねうめよわくとまくもかくやう
夕めのうれい神おがの郎はやにうそく祀するまく
ゆふもとまく角の萬葉祀ひうめくとまくもかく
林乃よ祀くとれいとめくとまくはうれいとまく
ゆふくとれいとめくとまくはうれいとまく
獨祀のとくふあん宮廟とおとおとおとおと
くふれあく風よく吹くむ底よく吹くむ底よく吹く
梅また雪乃ゆうてひざれをうなだれむつまてわでかまん
えうらふくゆくまくとまくとまくとまく

身惟仁

甲子

久きやうりけにへ郭もやうおのとひかゆ
うくわのうやうへ柿のえびすがい宮にくわ
らにまくわくまくわくわくわくわく
かわいよまくわくのみくわく
くわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわく
やういとくわく

مَنْ يَرْجُوا
نَعْوَانَ

あくまく風ひつまうたうの風
梅元さんやまうらまみよ
あめうわのねねくられ
浪うぶかこのむりうわくらくね
あめうわのねねくられ

蒙古の文化

身相

四

